

青山経営論集
第35巻 第3号
2000年12月

特別寄稿

実のり豊かあれ「建学の精神」

北見俊郎



(1) 「信仰と学問」の前提—むごい体験—

戦友の遺骨を抱いて、焼け果てた横浜に帰った。県下の静かな農村をたずねて彼の家にたどりついた。広い土間にいた母親は、言葉も出ないままに私をつきとばして遺骨を固く抱きしめ、土間に伏すように泣いていた。彼は恐らく一人息子で、学半ばで遺骨になったにちがいないと私は思った。彼とは同じ部隊の新兵で、ただ同県出身者のため遺族に届けろという命令であった。したがって彼については知らなかったが、ただ泣き伏す母親の姿は今もあざやかに残る。

それから、敗戦が近い頃に、属していた航空部隊が全滅した。多く無惨な死体となっている中を、ただ逃げるのが仕事であった。パイロットの顔がよく見える戦闘機を撃ちたくも実弾は配給されてなかった。ただ逃げ乍ら負傷者が樹によりかかりながらも、両手で腹をおさえているが、そこから血の噴水が2m位の輪をつくっていた。彼は同じ中隊の士官であったので、助けねばと思ってとどまったが、彼はよく威張るので好意をもてないためか、「この弾の中をそれどころではない」と逃げてしまった。しかし逃げながら、どうして助けなかったのか、どうして逃げたのか、この二つの思いが痛みとなって残っていた。

そして敗戦の通達(玉音)を聞くのに集合したが、さっぱり意味がわからなかった。その時は本部に属していたので多少わかったが、まじめな若い士官は何人が自殺したが、年輩者のそれは物資を持ち出させ、私は重要書類を焼けと命令された。焼き乍ら私は生きて帰れることを思い乍ら、今までうけた数多いリンチと、軍隊・天皇の意味の不明さと、脱走した何人かの「個人」というものを考えこんでいた。

(2) 大学生生活と信仰の過ち

泣き伏す母親、士官を助けねばと思いつつ逃げたこと、軍隊・天皇・個人のこと、以上は復員して大学にゆく頃の忘れがたい項目の一部でもあった。自分なりの印象の明確さは、キリスト教主義大学に入学したことと洗礼を受けていたことであった。泣き伏す母親に会えた時の10年前に、私は自分の母の死で泣き伏していた。それに威張る人でも、弾の中を逃げたのも、学生時代に何回も思い出していたが、軍隊・天皇性にかかわる不可解な社会と個人の問題も戦中・戦後の課題だけではないはずだ。(その後の欧米留学で、とくに「日本のあいまいさ」を教えられた。)

たしかに10年間の求道生活の結果が大学の先生や「建学の精神」のおかげで、①罪意識の自覚、②人間と死と限界、③キリストによる救い、④科学と神学、⑤哲学的理解等の長い告白の文章を読み、洗礼を受けた時には、与えられたことを感謝し、涙があふれ出た。しかし、問題を結論からいうと、私のとんでもない求道生活のあり方と、洗礼を受ける資格がなかったことを、あとになって深く反省させられた。

求道生活10年と言い、軍隊の経験や、そして、神学や聖書の学びを通じて、自分

が一番まちがえていたのは、真理の探求に関心があったとしても、真理を得ることが「信仰」であるという大きな過ちを私は「告白」の中で述べていた。真理を自分が得ることができたと感謝し、涙することは正に大きな過ちであった。罪の自覚と神の救いにあずかった感謝に変わることは単なる私の体験からではなかった。

(3) 「建学の精神」へ

以上は、断片的な戦中・戦後における求道的なこととキリスト教の信仰告白の過ちをとりあげてみた。これは私自身が「信仰と学問」の本来的な意義を体得していなかったという恥ずかしい反省記のように思われる。

私は「青山学院大学経営学部創設35周年」へのメッセージをお送りするつもりで書きはじめたが、どうもメッセージの常識から内容が離れたように心配せざるを得ない。ただ一つには青山学院大学における「信仰と学問」が本質的な「建学の精神」である以上、例え創設500年にしても、それに変わる点はない。経営学部創設期には、当時の関係者各位の中に「建学の精神」が基礎付けられ、学生にとっても熱心な対応であり得たように思われる。他のキリスト教主義大学においても、終戦直後の大学においては、「建学の精神」が具体的に生かされる傾向をもっていた。当時の学生生活は現在と異なるきびしい生活の中で、学問への情熱やキリスト教信仰へのひたむきさがあったが、経済・社会的な変動と共に技術的な展開で、日本は人間・精神の基本的なあり方が失われ易くなっている。

かつて私が「青山キリスト教学生会」に関与していた時代よりも、今はより充実していると信じたい。大学の教師は研究者としてのきびしい一面を課せられている。どの学部であれ、自ら、研究者として、また神学を専攻する者も単に牧師ではなく、神学者として見事な研究書を世に問うていられるであろうと思う。「建学の精神」が経営学部をはじめ全学に実るよう心から祈る次第である。

「忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。」
(ローマ、5-4)